

第37回学会大会開催にあたって

日本レジャー・レクリエーション学会(JSLRS)

会 長 鈴 木 秀 雄

関東学院大学教授、Ph. D.

この度、学祖井上円了先生が1887年（明治20年）に開学し、本年が創立120周年という伝統ある東洋大学（白山キャンパス）において、第37回日本レジャー・レクリエーション学会大会が開催されますことを会員の皆様とともに喜びを分かち合いたいと思います。

本大会は、11月30日（金）開催の小石川後楽園涵徳亭、旧古河庭園、六義園など「江戸・東京の庭」をテーマとする恒例の地域研究に始まり、引き続き12月2日（土）・3日（日）には『レジャー・レクリエーションの充実に寄与するオリンピック・レガシー』を大会テーマとしてオーガナイズドセッションも開催されます。

さて、本学会も時代の変遷とともに歩みを重ね、レクリエーション研究懇談会として発足〔1964年（昭和39年）3月10日〕して以来早43年になります。戦後の経済成長のひとつの特徴として、成果主義や費用対効果に基づく評価に注目が集まり、その流れは人そのものの評価や教育にまでおよび、プロセス重視の時代からプロダクト重視、即ち結果が重視される風潮として長く息づいてきています。To haveから To beへの変容の必要性が説かれて久しいのですが、必ずしも社会は素直にその方向に進んでいるわけでもありません。

社会が進展すれば、“レジャー産業の活発な働き”を伴うのは当然のことであり、市民一般の余暇活動はそのレジャー産業が準備する「楽しいものや面白いもの」を求めることとなります。社会の中に多様な活動がレジャー産業により準備されれば、必然的に余暇活動は好みのものを掴み食いの的に楽しむ**多角的嗜好形態**におよびがちになります。勿論それが悪いというのではなく、余暇活動の“**拡幅化**”にとってなくてはならないものですが、活動の“**深奥化**”に必ずしも役立つものでもありません。換言すれば、社会が豊かになればなるほど自らのエネルギーを費やしながらか知識・技能を蓄積していく**趣味化傾向形態**にはならず、レジャー産業により準備されている行事やイベント・活動などを利用する受動的な**多角的嗜好形態**である**発散型機能**（＝気晴らし・娯楽）の活動になり易いものです。余暇におけるレクリエーション活動の**蓄積型機能**（＝自己啓発・自己開発）の重要性はもとより、現代社会のせわしい生活形態の中では、心身の健康の維持増進の意味からも**回復型機能**（＝休息・休養）としてのレクリエーション活動など、これらの多機能の好ましい混合化・融合化（＝カクテル化）、組合わせ化（＝カップリング化）の再考が求められています。

研究領域が多岐に渡るレジャー・レクリエーション分野であり、すべての領域を会員個人の主体的研究だけでカバーできるものでもないことから、社会の多くの課題に対しレジャー・レクリエーションはどのような貢献ができるのか、また、本学会はこれらの課題解決に向けどう貢献していくべきかの視点に立ち、本学会がリーダーシップを発揮し、課題に対する具体的研究をプロジェクトとして立ち上げ、多くの会員の参画による共同研究プロジェクトの構築なども考えられてよいでしょう。

この大会を機に近未来の学会の有り様なども意見交換できればと願うと共に、会員相互の交流を通して新たな研究の視点を敷衍する学会大会であることも期待しております。